

魔法科転生NOCTURNE SS
置き場

人ちゅら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作は『魔法科転生NOCTURNE』のサイドストーリーのまとめ、あるいは蛇足の隔離所です。

※こちらに公開されたエピソードが、後日本編に組み込まれることがあります。

※本編に掲載されたエピソードが、後日こちらに切り離されることもあります。

【本編】 <https://syosetu.org/novel/113000/>
(2019/04/――)

ひとまず先日ロールバックした分のエピソードを掲載していきます。

目次

ターミナルビル編

#028x1 都市の空隙 | 1

#028x2 狂騒の祭 | 11

ネタ短編

SS#001 黒い嵐 | 24

ターミナルビル編

#028x1 都市の空隙

八王子盆地の西の外れに、ぽつりと建ったアパートがある。

一棟二階建て、各階六部屋ずつの集合住宅は、築五年ほどの新しいものだった。一高生とその家族向けにと建てられたものだったが、立地条件の悪さが祟ったのか、初年度から満室になることもなかった。

そして今年度、かさむ維持費に音を上げた管理会社が売りに出したこのアパートを、奈良を本拠とする橘家のグループ関連企業が購入した。

入居者はあなた一人のみ。

人修羅^{あなた}という存在^{ありか}が在処と定めた場所が、通常空間のままであり続けられるはずがない。あなたが自身の在処と認めれば、そこは人修羅^かの坐す^{まし}【玉座】となる。マガツヒの満ちた【異界】化してしまうのだ。

だからあなたは物心ついた頃には既に独り、里山に建てられた社での一人暮らしを余儀なくされていた。

幼くして半ば捨てられたような形であるとはいえ、あなたにとつてもそれは都合が良かった。

もう一度幼児からやり直せと言われても、精神は六十年を生きて孫まで持った老年のもの。また人修羅の権能はあらゆる対話TALKを保証する。生まれてすぐに泣き声一つ上げず、それどころか明瞭な問いを発する赤子など、二十一世紀の現代においてはただただ異常だ。こうした異常に慣れのある間雑家だからこそ、驚きの中にあつても無難な選択肢を採れたのだろう。

幼い人修羅あなただが自儘に振る舞えば、いずれまともな人間は遠ざかり、面倒な人間ばかりが寄り集まってくることとなる。とはいえ今さら赤子や幼児のフリをすることもできない。故に隔離という選択は、最適と言えるかはともかく、適切な選択肢の一つであつたことは確かだ。

あなたの棲家はあなたがいる限り、マガツヒが無尽蔵に補充され続けている。仲魔を召喚したところで誰にも迷惑がかかるとはなし、連中も気まぐれに顔を出すことがあつた。当初はあなたの世話役にと派遣された間雑家の家人や門人も、大気に満ちた高濃度のマガツヒや仲魔たちのいたずらに耐え切れず、すぐにお役御免となつてしまう。

以来、あなたは一日の半分を悪魔たちに囲まれて過ごしてきたのだつた。

だから「一人暮らし」と言ってもそれは人間は一人というだけで、そこで暮らすモノの数は、常に複数であり続けた。

そしてそれは、転居した今も変わってはいない。

「おかえりなさいませ」

あなたが帰宅すると家憑き妖精のシルキーが手を止めて深々と頭を下げる。

ひと目にはモスグリーンメイド服に白のエプロン、頭には三角巾を結いた古めかしい装束が板についた妙齡の女性に過ぎない。だがそれで彼女を侮った人間は、高い授業料を支払うことになるだろう。人命の軽かった時代に生まれた悪魔は、総じて敵対者の生命をいとも容易く刈り取ってしまうところがある。

だが、そんな彼女もあなたにとっては仲魔かぞくの一人だ。

「うん」とも「む」とも取れない短い返事をする、手にしたカバンを手渡して、いつもどおり私室に引つ込む……つもりだったのだが、忙しなく家事に勤しみながらも美しさだけは変わらない白磁の手指に茶封筒を差し出されてしまった。

「お孫お孫さまよりお手紙が」

働かざる者食うべからず。

あなたはそれを受け取ると、今度こそ私室に引つ込んだ。

* * *

約一時間後。あなたは動きやすい普段着ジャージを身にまとい、夜の吉祥寺駅に姿を現した。紙切れ一枚で押し付けられた実家の仕事を、さっさと片付けてしまうためだ。

今世紀初頭の繁華街の賑わいを知るあなたにとつて、今生の夜はあまりに人寂しい。とはいえこれは吉祥寺に限った話ではない。二十一世紀末の現在、夜の街を歩くという行動そのものが、かつてに比べて不要になっているという現実が有る。

小氷河期と三次大戦という二つの大災害カタストロフは、世界人口を九十億から三十億まで激減させた。単純に考えても、実に三人のうち二人が死亡したという異常事態だ。それは圧倒的な人手不足という形で各所に現れ、否応なしに社会を崩壊させる要因となった。それまで多くの人間が分業することで支えてきた生活は、あつという間に瓦解したのだ。

だが人間とは環境に適應する生き物である。当然こうした状況にも適應すべく対策を講じた。特に威力を發揮したのが計算機科学であった。戦争と現代魔法学という二つの要素に後押しされ、急速に発達したそれは、それまで惰性で続けられてきた事柄、特に人間の職人芸パワに依存してきた諸要素に対し、高効率化というドラスティックな改革を

提案した。

徹底的に無駄を省いてゆく社会リストラックチャリングの再構築は、たとえば会社員が毎朝社屋に通勤して社屋で仕事をし、夜に退勤して帰宅するという働き方に対しても疑問を投げかけた。毎朝毎晩、満員電車で揺られて通勤する、体力も時間も全くの無駄、贅沢な浪費であると判断したので。

無論、直接人間が集まることの全てが無駄ということはない。直接顔を合わせて話すからこそ成立する事柄も決して少なくはないのだ。信用、信頼といった一種の未来視について、人類は未だ直感に優る技術を発見できていない。故に営業職や管理職の間人は、これまでどおり毎日社屋に足を運び、取引先と顔を合わせることを必要とした。実作業を伴う開発畑の間人もまた、通通勤というタイムロスを許容した——彼らの一部はむしろ帰宅という行為をこそ無駄と切り離れたがったが。

しかしして事務職の多くはそうした必要がないと判断された。彼らにはこれまで提言こそされながらも「実際的ではない」とされてきた在宅勤務テレワークが適切と判断され、それが標準となった。これには通信網のセキュリティの向上と関連法案の整備が一気に進んだことと無関係ではない。かつて平和ボケ、スパイ天国などと呼ばれた日本であったが、大戦を経てそのあたりの認識にも大きな変化があったようだ。

また街を歩く人間が減るといふことは、実店舗を常設する旧来型の小売業にも当然のように影響した。

以前からドローンと受け取りポストの併用によって手軽になったネット通販に圧迫され、更には大戦下において一人暮らしや核家族のライフスタイルが鳴りを潜め、誰もが緊縮策をとったことで死に体となっていた彼らだったが、この変化が致命傷となった。

小店舗のいわゆる個人商店という形態は姿を消し、商業ビルも空室だらけとなり、大型合併を繰り返したフランチャイズチェーンも熾烈な生存競争にやせ衰えてしまう。過渡期には日本各地でシャッター街が大量発生したという。

そんな中でも変わらず出歩く人種がいた。学生である。

生産力に直接寄与しない彼らは、急激な改革の流れの中で後回しにされてきた。無論、学校教育には一部変化があったものの、それらは教師たちの都合が大きい。実際、学生は一般学生、魔法科学生を問わず学校施設に通学し、クラス別に教室に集まってオンライン授業を受け、その日の課題が終われば下校するという前時代のスタイルを踏襲していた。

彼らにとって、街を歩くことは生活の一部であった。そして代わり映えのしない学生生活の彩りとして、街での浪費はちよつとした娯楽だ。彼らの需要を見込んで、街は再建されていった。彼らが成人した後も、学生時分のスタイルのまま街を歩き、地元産業を支えてくれることを願つて。

政府のインフラ大投資によつて復興に賑わつた七十年代、景気を回復させた八十年代を経た2095年現在、多くの人々にとつて街とは生活環境ではなく、そのものが娯楽施設のような認識となつていた。

実店舗の多くは実際に手にとつて見なければ分からない衣類や生活用品を展示したショールームや、あるいは広い空間を必要とするアミューズメントパークとなり、また彼らの需要を見込んだ外食産業が幅を利かせている。街を歩くということは今や必要からの行為ではなく、より娯楽に近いものへと変化していった。

ただそれは学生という世代をポリウムゾーンとした設計だ。そのため彼らの活動時間から外れた夜の街は、メインストリートから追いやられてしまう結果となつた。加えて戦前に比べて性に開放的な雰囲気は薄れ、水商売に対する風当たりが厳しくなつたこともある。日中はまだしも、夜の街並みというのは往時に比べてずいぶん寂しいものとなっている。

もつとも、昔の実際を知る人間自体が、もう居なくなつてしまつたのだが。

そんな寂れた夜の町並みを少し歩いて、あなたは目的のビルに辿り着いた。

武蔵野市吉祥寺南町ターミナルビル。

【境界化】の兆候があるため、要調査となった物件だ。

* * *

ビル周辺に駐められたバイクの台数は十八台。

最低でもそれだけの人数が中にいる、と考えるべきだろう。

とはいえ相手がただの人間であるなら、そう気を張る必要もない。面倒があっても後始末をするのは別の誰かだ。問題はその中に魔法師がいた場合だが、ビル全体が薄っすらとMAGに覆われていて、中の様子はよく分からない。

テナント募集中の張り紙がされたガラス扉を開けると、あなたは無造作にビルに踏み込んだ。

戦前、旧吉祥寺駅に接続する駅ビルとして建てられたこのビルは、戦後間もない2070年に竣工された。復興の波に遅れじと再建されたが、そのため首都圏鉄道網のリニ

ア化とそれに伴う駅の移転から取り残され、またその後の急激な時代の変化に対応できず、八十年代には既に幽霊ビルとして知られていたらしい。

安定成長期1970年代から平成不況二十世紀末、人口過密時代二十一世紀初頭にかけて都市部に建てられた多くの商業ビルは現在、相続者を失い、あるいは相続権を放棄されて更地となっている。それでも残ったものや、このターミナルビルのように戦中戦後の再建期に建てられたものは、犯罪者が拠点化して隠れ潜む、不法占拠者が住み着くなど、都市の死角として問題になっている。

そうした都市の死角では暴力行為や薬物の濫用、性行為など、動物的な行動がとられがちだ。そして人間の血肉が撒き散らされ、原始的な激情が発散される場合は、即ちマガツヒが捧げられる擬似的な祭壇、MAG溜まりとなる。通常それらは徐々に拡散し、薄れて消えてしまったため、さほど問題にはならない。だが雲散霧消するよりも多くのマガツヒが溜まってゆけば、いずれ「境界化」を起こして悪魔を呼び寄せたり、更に偶然が重なることで「異界」と化してしまう。

それは【異界】の管理者を標榜する間雑家としては、見過ごせる状況ではなかった。

まあ実際は、東京進出の挨拶代わりといったところなのだろう。

あなたにとっても約八十年ぶりの東京に、思い入れがないわけではない。あの

ハゲ^{ハゲ}し^しい^い
東道青波の差金だろうと考えると蹴飛ばしてやりたくもなるが、件の手紙は祖父^{まご}の手に
よる正式なものだ。そういうわけにもいかなかった。

加えてもう一つ。

あなたの身中のマガタマ^{マサカドウス}・公の加護が「約定を守れ」「トウキヨウを護れ」と震えてい
た。

——言われるまでもない。

模擬戦に刺激されたのか、少し体を動かしておきたいと思っていたところだ。

#028x2 狂騒の祭

◇『ターミナルビル』

◇武蔵野市吉祥寺南町の旧吉祥寺駅（現在は廃線）のターミナルに隣接した商業ビル。竣工は2070年。

◇戦後復興期に取り残されまいと建設されたものの、複合的な事情により着工が遅れる。2068年から始まった鉄道網再編の波に取り残され、営業開始から一年と経たず大半のテナントが撤退、幽霊ビルと化した。

◇近年では未成年者がバイクで乗り付け、空きテナントを集会場代わりにしているところが目撃されており、近隣住民からも不良の溜まり場として避けられていた。そのため自治体に取締の請求が何度も出され、警察もパトロールを強化するなど一応の対応をしているものの、解散を命じればすぐに撤収するため名目に乏しく、現状、イタチごつこの様相を呈している。

……というのが、あなたが封筒を受け取ってから家を出るまでの間に、情報端末から仕入れた事前情報だ。

生まれ直してからこの方、ほとんどの時間を実家のある奈良の山奥で過ごしてきたあなたは、都市部のイメージは前世のものを引きずっていた。前世では後半生を山中に隔離された秘密研究所で過ごし、今生でも山奥の社での暮らしが長かったあなただ。これまで常識を更新する機会に恵まれてこなかった。

だがイメージそのものはそれほど大差ない。

ただし治安は悪化しているようだった。

人の出が少ない街では、当然のように相互監視の目は失われる。だが他者の目がないところでは、人間は道徳や美徳といった規範を簡単に忘れてしまうものだ。それを補うように街中に街路カメラと言う名の監視システムが展開されてはいるものの、他人の存在ほどには抑止力になりえていない。

更にはコンビニエンスストアやファミリーストランの多くが二十四時間営業を廃止したことも、地味に影響している。多くの悪事は暗がりで行われるものだ。そうした意味で、深夜になっても変わらず強い光源となるそれら店舗は治安維持に貢献していたらしい。しかし労働環境が改善され、各種インフラに携わる人間を除けば深夜に出歩く必要のある人間も激減し、また大手の宅配業者がドローン配送限定の二十四時間対応を始めてこの方、需要の薄れた二十四時間営業を維持する店舗はほとんどなくなってしまう。

故に日も暮れた夜の街では、街灯の明かりが頼りとされている。

その現実にも初めて遭遇した時は、まるであなたが最初に生まれた時よりも前に逆戻りしてしまつたようだと、不思議な感覚に囚われたものだった。

街中は公設の監視システムが展開されているが、民間の建物の中にまでそれが及んでいるわけではない。

あなたが踏み込んだそのビルも、天井のあたりを見れば、なるほどカメラらしきものは設置されている。だが果たしてそれが機能しているのかどうかは定かではない。正面エントランスから階段を上がれば、壁面にはスプレーアートが無数に無秩序に描かれているのだ。もはやビルの所有者も、色々と諦めてしまっているだろうことが予想された。

あなたは「多少は乱暴にしても平気かな」とあたりをつけ、次のフロアへと向かった。

* * *

あなたが侵入した時点で既に、ターミナルビルの中には自然界にはありえないほど大量のマガツヒが満ちていた。だが玄関口からわずかに溢れていたモノを除けば、マガツ

ヒは見事にこのビルの中に留められている。

通常、マガツヒを無機物で遮ることは出来ないものだ。であるなら、このビルの現状は何者かによつて意図的に仕組まれたものであることは明らかであった。

建物を一つの容器、一つの世界と見做してその中に生気を満たす。そして溜まったエネルギーを「魔界」側へ漏出させ、「物質界」との境界に孔を開けて両者をつなぐ。極めて原始的な魔法儀式だ。

既に漏出は始まっているようで、ビル内は「境界化」が始まっていた。空間がねじれ、ビル内部は既に見たとおりに歩くことは出来ない。三階へ上ろうと階段に足をかければ、次の瞬間には打ち捨てられたマネキンの散らばるブティックの跡地に立っていた。

なぜもつと早くに話を持ってこなかったのかと、あなたは左手で自身の顔を覆い、ため息混じりに頭を振った。

空間のねじれは「境界化」が安定すれば治まるので、それまで放置するという選択肢も無くはない。だが安定するまでにかかる時間はマチマチで、ほんの数秒で終わることもあれば数日経っても終わらない場合もある。それに一度帰つてまた来るのでは面倒だ。

ここは少し手を借りるか、あなたは仲魔を召喚した。

——花魄。カハク

「はいはい」

あなたの突き出した右手の先に強い光が弾けると、次の瞬間には右手の甲に腰掛ける小さな小さな美女の姿があった。蝶の翅を持つ地霊・カハク。その愛らしい容姿にふさわしく、応えた声音は小鳥のさえずりのようではないか。

だが見た目に反し、彼女は首縊りに使われた木の精とされる。無邪気な笑顔の奥に潜んだ瞋恚しんいの炎は、人一人を簡単に焼き殺せるだけの力を持つているのだ。

——道案内を。

「えーまたア？　そういうのってピクシーの役目じゃない？」

——……。

「じよ、冗談！　冗談だから。そんな怖い顔しないで。ね？」

——……………。

「じゃ、じゃあ、あのっ！　ついて来なさひっ」

人間を殺しうる強い力を持つとは言え、悪魔としての彼女は下級で、戦いにおいては雑霊ザココを掃討する程度が関の山だ。それでもこの一言多い彼女アクマを呼んだのには、二つの理由があつた。

一つは木の精という彼女が持つ権能。

彼女は死者の残した無念おもいを、かすかな花の香に乗せて伝えるという。その花の香を操つて空間を探り、また香りを辿ることで、目的の場所を探し当てる事が出来た。その力はこのようにねじれた空間でも変わらず有効なため、あなたは同じような場面で彼女を頼ることが少なくなかつた。

もう一つは、彼女が顕現するために必要となるマガツヒが少ないということ。

あまり高位の悪魔を呼んでしまえば、この場に蓄えられた不安定なマガツヒにどんな影響を与えるか分からない。マガツヒを食い尽くして「境界化」が沈静化されればよいが、何らかの術式によって現れた悪魔が狂わされたり、溜めこまれたマガツヒが予期せぬ魔法に変じてしまうことも、無くはないのだ。

それはさておき。

そんなに怖い顔をしていただろうか？

あなたは自分の顔を一撫ですると、逃げるように飛んでゆくカハクの後を追つた。

* * *

すぐそこに見えていた階段にたどり着くためにフロアを一周するような手間を掛け、あなたたちは二階、三階と踏破する。

何度か似たような場所を歩かされた。

カハクがささやかな逆襲を試みたのだろうか？

だが彼女は気まぐれと悪ふざけを信条とするピクシーと違い、どこか根が真面目で一本気な性分だったことを思い出す。そんなことはしないだろう。あなたは疑念を抱いたことについて一言「すまん」と謝ったが、彼女は「わ、分かればいいし分かれば……え、なんで？」と目を瞬かせていた。

途中、マガツヒに誘われて迷い出たモウリヨウや、悪魔の概念カタチを持ちそこねたスライムできそこないに遭遇するが、ほとんどは怯えるように縮こまっていたため、あなたは無視して先を急ぐ。カハクに手を出そうとしたごく少数の愚か者にのみ、あなたの鉄拳を叩き込んで。

階段下に立ったときから、既に噎せ返るような生の匂いが漂ってきていた。

あまりの臭氣にカハクは「あとは階段上ればすぐだしここまで大丈夫よねゴメンも無理」と早口にまくし立て、さっさと「魔界」へ帰ってしまった。

階段に足をかけてみても、もう別の空間にずれ込んでしまうことはない。あなたは無言で階段を上ってゆく。

そうしてたどり着いた四階は、コンクリート剥き出しの太い角柱が何本も立ち並んだ吹き抜けのホールだった。

「何者か」

広い伽藍洞がらんどうのホールでは何組もの裸の男女が絡み合い、獣声を上げていた。

その周囲には手酷く殴る蹴るの暴力を振るわれただろう紺の制服の男たち。おそらく派遣された警備員であろう彼らは血まみれ、痣まみれで、もはや微動だにしていない。脱ぎ散らかされた衣服は酒と砂埃にまみれ、ライダースーツのゴムや革、それに混ぜ合わされた血と汗と交合の臭いが充満したそこは、およそ正気の間人が長居できる場所ではなくなっていた。

狂乱の祭りの奥に、ひとときわ異様な明かりが一つ。この室内で、よもや火を焚いているのだろうか？ 何か燃やしているのか、煙ってしまったてはつきり見通すことが出来ない。獣声と肉を打ち付ける音に紛れ、パチパチと何かの爆ぜる音が聞こえた。

そしてその煙の向こうから、誰かがあなたに誰何すいかの声を上げた。ひび割れた破鐘われがねのような、ひどく耳障りな声だった。

——何をしている。

「分からんのか。分からなければそこで見ているが良い。じき終わる」

——お前は魔法師か？

「ふん。だったらどうだと言うのだ」

——なにを降霊おろしようとしている？

「ほうー」

あなたの問いかけに、男は驚嘆の声を上げる。そして片手をうるさげに振るうと、あなたの方へと一步を踏み出した。

男の手によって煙を払われると、その奥に護摩壇があることが見える。「境界化」していなければ、一酸化中毒で今頃全員死んでいたのではないだろうか？ あなたのそんな雑念を余所に、男は一人、言葉が続けた。

「これが何か分かるとは。そのような形なりで、貴様も魔法師なのか？」

護摩の煙がにわかには晴れたその向こう側に、異様な風体の男が一人。

手には金剛杖、白衣に鈴懸をまとい、袴の裾が邪魔にならないよう脚絆で絞られている。そして頭部には黒い頭襟とぎんが括られていた。いくつか足りないものもあるようだが、修験道を修める法師、いわゆる修験者の装束であろう。

小さな驚きは言葉となつて口を突いた。

——修験の者がこんな町中で、珍しい。

山岳信仰に根ざした修験の魔法を使う古式魔法師は多い。しかもあなたは霊峰の社に暮らしていたのだ。遭遇する機会はそれなりにあった。しかもあなたは霊峰の社

だが彼らのほとんどは、山から離れることを嫌う。霊力の源たる山から離れて暮せば身が穢れ、自身の法力——即ち魔法力——も落ちてしまうためだ。そのため都市で出会う修験装束の人間というのは、ほとんどが魔法力を持たない一般の信者や、一時の非日常を楽しむ道楽者コスプレイヤ、似非魔法師、さもなくば辛い修行からドロップアウトした修験者くずれとされる。

都市で暮らす古式魔法師が少ないわけではない。托鉢、修行と称して里へ出る修験者

もごく普通にいる。だがこんな都市の只中、しかも自然からかけ離れた商業ビルという場で行くわすなどとは予想だにしていなかった。

だからこそ、その意外が言葉となった。

そしてそれは、彼の琴線に触れてしまったらしい。

「少しは物の道理を弁えた者かと思つたが、所詮は小僧。上つ面しか見ることが出来んか！ 我がアシヤ流にとつて自らの在るところこそが御山おやまよ。しかもこの俺には御祖ドウマン公の生まれ変わりと言われた才がある。我が法力は衰えてなどいない！ その俺がさらなる力を手にするところ、指を啜えて見ているが良い！」

怒りに充血した眼はあなたを睨みながら、どこか焦点を失っていた。

そんな男の様子に、失敗したとあなたは小さくため息を漏らす。

それが更に男の怒りを買った。

彼は杖を持たぬ左手で印を組み、真言を唱え、足を踏み鳴らした。

——不動金縛りの術、だったか。

幾人もの古式魔法師と手合わせをしてきたあなただったが、そのあなたの目から見て、確かに彼は手際が良い。印、真言、歩法の組み合わせで瞬く間に魔法式を生成するその技術は、これまで手合わせした修験の魔法師の中でもかなりのものだった。

魔法の強度も悪くない。

それこそカハクあたりでは、抵抗することも出来なかつただろう。

だが、言い換えればその程度だ。とてもではないが才有りとは言い難い。

そしてなにより、遅すぎた。

先日手合わせした幹比古みきひこの術式には、比肩しうるかも知れない。

しかしCADを使った現代魔法師の模擬戦を見てしまった後では、その技量にどれほどの意味があるだろうか。

ましてやこの程度の距離、あなたの脚力なら一呼吸で手が届いてしまう。

そしてなによりあなたが身に秘めたマガタマは、人修羅あなたの歩みを止めさせはしない。

だが、あなたはされるがままに魔法を受けた。

【境界化】が始まり、マガツヒが不安定な状態にあつては、あなたの仕事は果たせない。何を降霊するつもりかは知らないが、儀式でもなんでも終わらせてもらい、さつさと安定させなければならぬのだ。そのために、あなたは一芝居打つことにした。

あなたが身動きもしなかったことで、男は満足気に一つ頷き、あなたが笑って肩を回したことで、男は驚愕にその顔を凍りつかせた。

「なっ……!!? なぜ、動ける……!」

——さて、な。

「ぬうう! だがその慢心が命取りだ。それ見ろ、今にも神は降りてくる! 我が儀式、我が請願は成就せり! 貴様の勝機は永遠に失われたぞ!」

あなたの「挑発」は、どうやら上手くハマったらしい。

その喚き声に応えるように男の背後の護摩壇が爆ぜ飛ぶと、男を濃密なマガツヒが包み込んだ。

ネタ短編

SS#001 黒い嵐

西暦2012年3月。

間雑かんざつシンは南極大陸にその姿を現していた。

養護保徳室の先生教諭という新しい仕事にも慣れ、あれやこれやと考える余裕が出来たシンは、先

年末、幼い頃からの付き合いである橘たちはなちあき千晶との結婚を正式に決めた。

とはいえ両親ともに一般家庭で育ったシンとは異なり、千晶は——分家とはいえ——れつきとした旧財閥の令嬢である。諸方面への根回しやらで時間がかかり、まだ入籍には至っていない。おそらくは株主総会の後、6月頃になるだろうと言われている。

そんなわけで、それまでに独り身でやることをやってしまおうと思っていた矢先に、あの氷川M字ハゲに誘われ、こんなところまで来てしまったというわけだ。

それにしても何故、南極なのか。

これはつまり——

「つまりは君の全力を確認しておく必要があるということだよ」

分厚い氷に覆われた氷面は、鏡のように太陽光を反射するが、それでもこの男の以前よりも更に後退した額の輝きには優るまい。などと益体もないことを考えながら、シンはかつてのシジマ軍総司令、そして今では自身の実質的な後見人となっている氷川ひかわの話を聞き流していた。

「この世界はあの世界ポルテクス界ほど危険に満ちているわけではない。とはいえ今後もそうであるとは限らないし、君とあの人の再創世によって、かつての世界と比べても悪魔たちがより出現しやすい土壌にもなった。このまま平穩無事というわけにもいかないのは承知のはずだ」

——それは分かるが。

「加えて戦争だ。既に資源の枯渇は世界各国の知るところとなっている。石油、食料、水、と戦争の火種はあちこちで燻っている。希少鉱物レアアースは、環境破壊しながら掘りまくってかれてる某国のお陰で、さほど気にする必要はなさそうだが」

——なるほど。

「再創世あ後にも話したことだが、現在、先進各国が魔法の力、言い換えれば「悪魔に関する研究」を急ピッチで進めている。無論、我が国日本でもだ。その流れがいずれ君にたどり着くことは想像に難くない。実際、シヤドウ事件シヤドウ事件について日本はもちろんのこと、諸外

国からも調査が入っている。君も魔丞も、このままでは今の生活を手放さざるを得なくなる」

——そうか……

* * *

シャドウ事件とは、シンが養護教諭として勤務する私立・月光館学園で人知れず起こった超常事件のことだ。

ある日を境に月光館学園を中心とした地域で、人間が自我を喪失するという現象が生ずるようになった。この自我喪失を實際に起こしていたのが「シャドウ」と呼ばれる悪魔たちであり、またその母たる夜の女神「ニユクス」の分霊わけみ、更にその影たる死神「デスIIニユクス・アバター」である。

遡れば桐条財閥の会長・桐条鴻悦きりじようこうえつが起こした十年前のとある実験に端を発したこの事件は、月光館学園の生徒たちの手によって解決された。

シンはニユクスの分霊の居城・タルタロスの塔への攻撃には参加しなかったが、代わりにアマラ経絡の小部屋へつながる「扉」を用意し、またタルタロスの塔に支援物資を置いてくるなどして、生徒たちに裏から力を貸していた。

この事件を集結させるにあたり、一人の少年がその命を落とした。死の象徴たる死神「デスⅡニユクス・アバター」をその身に封じること、その影たるシャドウがこれ以上誕生しないようにしたのだ。

だが、シンはその結末に納得がいかなかった。

封印の器となつてしまった彼には、何の罪科も責任も無かった。十年前、偶然その実験事故から逃げ出したデスと遭遇してしまった。ただそれだけだったのだ。それだけでそれまで生きてきた世界かそくを奪われ、ペルソナ戦うための力を押し付けられ、十年間の孤独を経て少年は戦いを余儀なくされた。

シンは彼の来歴と己が人修羅化した経緯とを重ね合わせた。

それは到底、認められるべきものではない。

認めてはならないものなのだ。

故にその少年の魂を救済すべく、アサクサの泥を求めた。人間の写し身ヒトたるマネカタを作つて魂を移し、別人として新たな人生を与えた。

* * *

「米国では先日、全長何十キロという巨大な粒子加速器アクセラレータを使って世界に「ほころび」を

作る魔術研究が実施された。素粒子物理学、特に高エネルギー物理学と魔法学の出会いだ。そしてこの実験の最中、わずかな時間、刹那よりも短い時間だが、世界に「穴」が空いた。人間が科学の力でアマラ経絡への道を開いてしまった」

……………

「もちろん、それを望まない勢力も有る。使用された加速器は事故に偽装して破壊されたから、当面の心配はない。同規模の加速器の建設にかかる時間も考えれば、ざっと数十年単位で計画は頓挫するだろう。だが記録を消し切れることは出来なかつたし、その寸毫の時間でアマラ経絡からこちらの世界に悪魔が進出してきた」

無論、アマラ経絡を通じて人間界アッシュャー界に現れたからと言って、こちらの世界に存在を安定させられるわけではない。召喚と同じように、存在を維持するためのマガツヒM^MA^AG^Gは必要になる。

マガツヒを補給したければ人間を襲うのが手っ取り早い。そもそもマガツヒを消費しないよう、こちらの世界に存在を安定させる方法だつてある。どちらにせよ、悪魔が現界あらわれした場所のすぐ近くにいた人間は哀れな被害者に早変わりというわけだ。そしてそれは、既に終わってしまった現実である。

——…誰だ？

「流石にそこまでは分からない。分かっているのは、それなりに霊格レベルの高い悪魔が現れただろうということ。これは現場にいたガイア教の魔道士たちが皆殺しにされたことからの推測だ。それからその現場近くにいた魔道士の一人が、事件後にカリフォルニア州の空港に現れたこと。そのままその魔道士の消息が途絶えたこと。それだけだ」

——皆殺しになってないじゃないか。

「それは言葉の綾というものだ。とはいえ目撃されたその魔道士が、はたして生き残りのかどうかは分からないが」

——ああ……

数多の神話伝説にあるとおり、死者を蘇らせたり、死体に別物の魂を乗り移らせて操ったり、死体を物として動かしたりすることは、さまざま悪魔たちが持つありふれた権能だ。

あるいは生きたまま悪魔と精神たましいが同調シンクロしてしまい、肉体を乗っ取られた場合。これがマガツヒの消費を抑え、存在を安定させる手取り早い方法である。その実験事故とやらで出現した悪魔が、こちらの世界への長期滞在を目論んでいたなら、可能性は十分にある。

「その後の消息が分からないことを考えると、魔道士は北米大陸のどこかにいる、ということだ。どこかに隠れているか、市民として溶け込んだか、あるいはどこかの組織に匿われているかも分からないが」

——つまり、情報が漏れた可能性があるんだな。

「……そういうことだ」

——なら真の目的は威圧、いや威嚇か。

「……………」

西暦現在、地球という天体の表面はすべて先進諸国の監視下にある。

南極には先進諸国が観測基地を設営しており、また人工衛星からの観測も行われていることだろう。だがかつて国家の威信を賭けて行われた南極点到達も今は昔、既に南極大陸の政治的・軍事的重要度は著しく低下している。そうした事情から、観測の精度もあまり当てにはならない。

ここでシンが全力の攻撃手段を行使したとして、先進諸国は「何か凄まじいことが起こった」ことは分かるが、その詳細について知ることはいかならないだろう。

性能の詳細は不明だが、明らかに脅威となりうる攻撃手段がある。

その事実だけが伝わることになる。

——そうしてお前たちは、俺を囲い込みたい。そんなところか。

「否定はしない。これからの世界情勢を考えれば、強力なカードは一枚でも多く欲しい」

しかし、たとえ観測衛星や各種機器が、これから起こすことの情報^が得られなかったとしても、ここに氷川を始めとするガイア教団の一味が同席している。彼らから情報が漏れないとも限らない。彼らはシンの弱みをも一つ握ることになる。

要するにこれは「保護してやる」という名目で、氷川がシンを自分たちの陣営に取り込むための策でもあるわけだ。

——ふん。

元よりこすっからい駆け引きの世界で、氷川に敵うとは思っていない。^ポ受胎^ルトウキヨウ^ス界^界での戦いから帰った氷川は、短兵急な行動路線から、地味で時間のかかる調整路線へと舵を切っている。

たった数年ではあるが、目的も背景も異なる数多の組織と粘り強く交渉し、妥協を重

ねながらも確たる利益を得てきた氷川に、一学生としてデータサイエンスにうつつを抜かしてきたシンが敵うはずもない。もちろん、氷川がシンを害そうとするなら、シンはただ無言でその鉄拳を振るうだけだが。

——まあ良いか。俺自身、確認しておきたかったのも確かだ。

「なら」

——だが的はどうする？

「任せたまえ。ここから西に一キロほどのところに、廃棄された南極基地がある。冷戦期に東側の某国が建てた、生物兵器の開発工場だ。条約によって廃棄、無人化して久しいが、南極では撤去のコストも馬鹿にならない。放置しておけば自然に還る、といった性質のものでもないしな」

——方が一、爆散して危険な細菌が撒き散らされる。なんてことはないよな？

「可能な限り処理はされているはずだが、可能性はゼロではない」

——つまりそのあたりの処理を請け負ったわけか。

「不可能かね？」

——いや、可能だ。

「よろしく」

* * *

人修羅最大の攻撃手段は何かと考えた時、答えはいくつも存在する。

そのうち、特に多くの賛同者を得られるものは、次の三つだ。

ひとつは【貫通】の鉄拳。あらゆる物理的魔法的手段を無視して対象にダメージを与える権能は、人修羅の持つ純粹な力の強さと組み合わさることで無双の破壊力を発揮する。人修羅の理不尽の象徴とされる能力だ。

ひとつは無限の持久力。数多の仲間を従え、数多の回復手段によって無限に近い継戦能力と、数え切れない攻撃手段を持つ人修羅にとって、時間無制限であれば、およそ打倒できないもの、破壊できないものは存在しない。

そして最後のひとつが【地母の晩餐】だろう。

これは人修羅の権能ちからの中でも特に異色のもののひとつだ。【地母の晩餐】は本来、攻撃手段ではない。これは生命の母たる大地の神——地母神——を喚起し、供物と祈りを捧げる太古の供儀を模したものである。

敵を供物として捧げること、その存在を大地に還すことで攻撃とする。そうした権能であった。

原理としては、太古の供犠として実際に行われていた祭祀なのだ。人修羅でなくとも行うことはできる。

ただし儀式に際しては、まず地母神を喚起しなければならぬ。これは儀式を行う祭司の力と照応する。並の人間の魔道士には、それほど強力な地母神を喚起することはできないのだ。そして喚起される地母神の力が、そのまま対象から存在を地に還す力——つまり攻撃力——と照応する。

再創世を為した創世主として、あらゆる悪魔、あらゆる神々の源流となった現在のシンがこの力を揮えば、照応する地母神は最大級のものとなる。

そのためシンは、再創世後にこの権能を揮ったことは一度もない。良い機会だと、シンは一人、ほくそ笑んだ。

そうして放たれた「地母の晩餐」の権能。

独特のステップと、歌とも唸り声ともつかない嘯呼くちぶえによって喚起された地母神は、メムアレフ。

創世主たる間難シンの影アバターのひとつであり、地球という惑星そのものを司る、規格外の太母である。

* * *

その日、南極大陸に直径数キロに及ぶ巨大な円筒形の暴風圏が出現した。

それから約二ヶ月の間、それは急激に拡大しながら大陸上に存在するあらゆる人工物を飲み込み、それらを跡形もなく消滅、地上を漂白し、そして突如として消滅したという。

原因不明の超常現象に世界各国は色めき立ち、一時は研究施設建設の動きが活発化したものの、何らの成果を得ることもできないまま次第に下火となり、南極大陸はふたたび静寂の大地になったという。

そして間雑シンは二ヶ月の無断欠勤の末、月光館学園を解雇された。